

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04580

研究課題名（和文）日本教育思想史における 教育 哲学 政治 の関連の構造

研究課題名（英文）The Structure of Correlation among "Education", "Philosophy" and "Politics" in the History of Educational Thought in Japan

研究代表者

櫻井 歓 (SAKURAI, Kan)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：60409000

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円

研究成果の概要（和文）：近代以降の日本教育思想史における 教育 哲学 政治 の関連の諸相を、教育学研究者への聞き取り調査（インタビュー）のほか、京都学派や戦後教育学に関わる文献研究を通じて探究した。具体的には、(1)戦後教育学を担った勝田守一や梅根悟と関わりのあった研究者へのインタビューとともに、(2)京都学派（西田幾多郎、天野貞祐、木村素衛、森昭）や戦後教育学に関する文献研究を実施した。本研究を通じて、政治的対立の枠組みでは捉え切れない京都学派と戦後教育学の諸相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、次の二つの点で学術的・社会的意義を持つものと考えられる。第一には、教育学研究者へのインタビューにより教育学分野の新たなテキストを創出した点である。これは近年の学界の動向とも呼応するものであるが、勝田守一や梅根悟に関する貴重な証言を得ることができた。第二には、近年発展の目覚ましい研究分野である京都学派教育学と、いわゆる戦後教育学とを架橋する端緒を築きつつある点である。両者は概してその政治性をめぐって対立的に捉えられるが、本研究を通じて図式的な割り切りを許さない諸相を明らかにしてきた。

研究成果の概要（英文）：This research inquires into various aspects of correlation among "education," "philosophy," and "politics" in the history of educational thoughts in Japan in the modern age. It is conducted through both interviewing researchers in education and studying documents concerning the Kyoto-school and the postwar pedagogy. Specifically, (1) I interview researchers who have connections with KATSUTA Shuichi or UMENE Satoru, representatives of the postwar pedagogy, and (2) I study documents concerning the Kyoto-school (NISHIDA Kitaro, AMANO Teiyu, KIMURA Motomori, and MORI Akira) and the postwar pedagogy. Through this research, I clarify various aspects of the Kyoto-school and the postwar pedagogy, which cannot be judged solely within the context of political conflict.

研究分野：教育哲学・教育思想史

キーワード：西田幾多郎 京都学派 勝田守一 梅根悟 堀尾輝久 宮澤康人 藤田昌士 奥平康照

1.研究開始当初の背景

2017 年度に本研究を開始した学術的背景として、概ね 2000 年代以降の教育学分野における二つの研究動向がある。以下に分節化して略述する。

(1) 教育思想研究における京都学派への注目

西田幾多郎を祖とする京都学派は、近代日本を代表する哲学派であるのみならず、西田の門下生の木村素衛や高坂正顕らの教育分野での活躍にみるように、教育という領域への京都学派の影響は見落とすことができない。その裾野は、勝田守一、上田薫ら京都学派の哲学に出自を持つ戦後の教育学者まで視野に収めればさらに広がる(教育と哲学の連関)。一方で、京都学派に対しては、太平洋戦争中の座談会「近代の超克」(1942)や「世界史的立場と日本」(1942-43)をめくり戦争協力のイデオロギーと見なすネガティブな評価もなされてきた(哲学と政治の連関)。さらに、いわゆる戦後教育学において「教育の自律性」の理念のもと、現実政治に批判的立場を採りつつ政治から独立した教育の領域を確保しようとする主張がなされてきたのに対して、2000 年代以降、従来の教育学のこうしたポジションが学問としての自閉的性格を生み出したとして批判に曝されるようになった(政治と教育の連関)。このように日本教育思想史において教育、哲学、政治の三者には緊張関係を含む連関がある。

京都学派の人間学・教育学に関する研究は、とりわけ 2010 年代に入ると、田中每実や矢野智司による再評価をはじめ、木村素衛や高坂正顕、勝田守一に関する若手研究者らの研究も発表され、急速な進展を遂げてきた。この分野の文献は枚挙に暇がないが、例えば田中每実編『教育人間学 臨床と超越』(2012)などがある(本研究課題の遂行期間中にも矢野智司の大著『京都学派と自覚の教育学』(2021)が出版されるなど、研究の進展は著しい)。

(2) インタビューに基づく教育学のテキスト創出

上記の動向と並行する研究動向として、インタビューに基づく新たなテキストの創出が挙げられる。2000 年代以降、既存の文献資料 いわば綴られた言葉 の利用にとどまらず、戦後日本において教育学研究をリードしてきた研究者へのインタビューに基づいて、新たなテキストを創出する取り組みが活発に行われてきた。その成果としては、教育哲学会プロジェクト「教育学史の再検討」グループによる『聞き書 上田薫回顧録』『聞き書 村井実回顧録』(森田[編]2009a, b)、日本教育学会特別課題研究委員会による『「戦後教育学の遺産」の記録』(日本教育学会特別課題研究委員会「戦後教育学の遺産」研究会[編]2013, 2014, 2015)などが挙げられる。オーラル・ヒストリーの方法による学問的省察であるこれらの取り組みは、いわば語られた言葉によるテキスト創出の取り組みともいえる。文献資料である綴られた言葉に対して、インタビューに応じて語られた言葉の特質は、特定の時間と場所において、語り手と聴き手の関係性を前提としつつ、もともとは身体を介して語られた声であるという、ナラティブの固有性にある。

2.研究の目的

本研究では、前項に記述した二つの研究動向を学術的背景として研究目的を策定した。教育 哲学 政治 の連関は、いわば緊張関係を含むトライアングル構造と見立てることができるが、本研究では、近代以降の日本教育思想史における 教育 哲学 政治 の連関について、西田幾多郎のテキスト、および京都学派の系譜に属する哲学者・教育学者・教育実践家らのテキスト、ならびに戦後教育に携わった研究者や実践家らへの聴き取り調査より創出されるテキストから読解することを目的として設定した。

筆者は、本研究以前に科学研究費補助金・若手研究(B)(2010～13年度)の採択を受けて「西田哲学の比較人間形成論的研究」を実施したが、本研究はこれを発展させるとともに、前項で述べた教育思想研究における京都学派への注目や、インタビューに基づく教育学のテキスト創出といった近年の学界の動向とも呼応しつつ、教育 哲学 政治 のトライアングル構造のもとに 教育 なるものを浮上させることを企図した。

3.研究の方法

本研究の方法は、(a)聴き取り調査(インタビュー)に基づくテキストの創出と、(b)既存の文献(テキスト)の読解・読み直しとに大別することができる。簡略に言えば、インタビューと文献研究と言っても良い。本研究は教育思想研究でありながら、教育学研究者へのインタビューに基づいて新たなテキストを生み出していくことを研究方法の一つとしている点に特徴がある。以下では、本研究で採用したインタビューと文献研究の方法について略述する。

(1) 本研究で実施した聴き取り調査(インタビュー)

インタビューは、大別して2期にわたり合計4名の教育学研究者を対象として実施した。

第1期は、2017年10月から2019年3月の期間に、堀尾輝久氏、宮澤康人氏、藤田昌士氏を対象として実施した(インタビュー回数は堀尾氏に2回、宮澤氏に1回、藤田氏に2回)。対象者の三氏は、いずれも1930年代前半生まれの同世代であり、1950年代前半に東京大学に入学し、50年代半ばから60年代にかけて教育学者勝田守一の門下あるいは影響下で学問上の自己形成を遂げたという共通性をもつ。また、堀尾、藤田の両氏は戦後の教育科学研究会(教科研)の運動を担ってきたのに対し、宮澤氏は教科研の外側に身を置いて教育史研究を進めてきたという差異がある。三氏には、(a)生い立ちに遡っての自己形成・思想形成、(b)勝田守一との関わりを含め 教育 哲学 政治 の連関についての見方、という概括的な2項目に関しては共通に聴き取りを行い、あわせて各氏の研究活動の展開など多様なテーマで語っていただいた。

インタビューの第2期は、2022年4月から11月にかけて実施した奥平康照氏への5回にわたる連続インタビューである。奥平氏は1939年に生まれ、東京教育大学にて学問上の自己形成を遂げた教育哲学分野の研究者である。学外の活動としては、浄土宗法養寺(江戸川区)の住職のほか、教科研「道徳と教育」部会世話人を務めている。インタビューに際しては、(a)生い立ちに遡っての自己形成・思想形成、および(b)教育学者梅根悟との関わりを含め 教育 哲学 政

治の連関についての見方、という二つを調査内容の大要として、概ねライフヒストリーに沿って聞き取りを行い、多岐にわたる内容について語っていただいた。

(2) 既存の文献(テキスト)の読解・読み直し

文献研究の方法によるものとしては、京都学派や戦後教育学に関わる文献研究を実施した。これについては、(a)戦後日本の教育政策・教育実践・教育研究に関する文献研究と、(b)京都学派に関する教育思想史的研究とに分節化することができる。前者に関しては、哲学者・教育学者・教育実践家らのテキスト(雑誌論文、教育実践記録を含む)のほか、学習指導要領等の教育政策文書を検討対象として、道徳、特別活動、総合的な学習の時間といった各カリキュラム領域の思想的背景に関わる研究を行った。道徳については勝田守一の「自主性」論、特別活動については国旗・国歌の取扱いをめぐる天野貞祐の発言、総合的な学習の時間については梅根悟のカリキュラム思想との関連で考察した論文等を発表した。後者については、京都学派の哲学者・教育学者の著作や近年の教育思想研究の論文等をテキストとして、いわゆる「京都学派教育学」をめぐる学説史的な整理を行うとともに、西田幾多郎、木村素衛、森昭の三者における「政治と教育」をめぐる議論について検討を行った(2024年5月現在、未発表)。

4. 研究成果

本研究は、既存のテキストによる文献研究にとどまらず、インタビューに基づく新たなテキストの創出を方法論として採用したため、オーソドックスな教育思想研究とは異なる特徴をもつものとなった。教育 哲学 政治 の連関について、本研究の全体として十分まとまりのある結論が得られたとは言えないが、「京都学派=保守的」対「戦後教育学=進歩的」とみるような、単純化された政治的対立の枠組みでは捉え切れない京都学派と戦後教育学の諸相を明らかにすることとなった。以下では、インタビューと文献研究に即して研究成果の概要を述べる。

(1) 現代の教育学研究に関する証言

教育学研究者へのインタビューについては、2冊のインタビュー記録冊子を発行するとともに、関連する学会発表や論文執筆を行い、研究成果を公表した。記録冊子は、『教育学研究者の自己形成と戦後日本の教育学 堀尾輝久氏、宮澤康人氏、藤田昌士氏への聞き取り調査の記録』(櫻井[編]2019) および『教育学研究者の自己形成と戦後日本の教育学(その2) 奥平康熙氏への聞き取り調査の記録』(櫻井[編]2023)の2点である。いずれも、対象者自身の生い立ちに遡っての自己形成・思想形成について聞き取りを行うとともに、堀尾、宮澤、藤田の三氏については勝田守一との関わり、奥平氏については梅根悟との関わりを含めて、同時代の教育学研究をめぐる状況等について貴重な証言を得ることができた。

とりわけ、勝田を京都学派の系譜に位置づけ直す手がかりとなる可能性をもつ情報を得ることができたことは特筆できる。例えば、宮澤氏へのインタビューのなかで次のように語られた。「天野貞祐については、これも名指しではないですけど、勝田さんは、日本のカント学者は戦

争中、天皇制国家主義、全体主義への批判を、まさしく学問的立場からできなかった。それに対して、ドイツのカント学者はカント研究の学問的立場から、ナチズムをちゃんと批判できた。その点が対照的だったと、そういうことを言いました」(櫻井[編]2019: 122)。

本研究で実施したインタビューの記録から何を読み取るかについては、今後の研究に委ねられる面も大きい。2冊のインタビュー記録冊子は、研究成果の社会的還元を目的として日本大学芸術学部櫻井研究室にて配布している(連絡先: sakurai.kan@nihon-u.ac.jp)。

(2) 教育 哲学 政治 の連関の諸相

本研究では、教育学研究者へのインタビューに基づくテキスト創出を重点的に遂行することとなったため、既存のテキストに基づく文献研究において十分まとまりのある成果を得られた訳ではない。それにも拘わらず、京都学派に位置づけられる西田、天野、木村、森といった人々と、戦後教育学に位置づけられる勝田や梅根といった人々の 教育 哲学 政治 をめぐる思考を丁寧に検討した場合、京都学派と戦後教育学とを単に対立的に捉えることでは捨象されてしまう諸相のあることを明らかにできたものと考えている。文献研究をさらに進展させ、京都学派と戦後教育学との対立点と共通点とを解明していくことは今後の課題となる。

<引用・参考文献>

- 櫻井歓[編](2019)『教育学研究者の自己形成と戦後日本の教育学 堀尾輝久氏、宮澤康人氏、藤田昌士氏への聴き取り調査の記録』。
- 櫻井歓[編](2023)『教育学研究者の自己形成と戦後日本の教育学(その2) 奥平康熙氏への聴き取り調査の記録』。
- 田中毎実編(2012)『教育人間学 臨床と超越』東京大学出版会。
- 日本教育学会特別課題研究委員会「戦後教育学の遺産」研究会[編](2013)『「戦後教育学の遺産」の記録(資料集 No.1)』[大田堯 東京大学名誉教授、竹内常一 國學院大学名誉教授]。
- 日本教育学会特別課題研究委員会「戦後教育学の遺産」研究会[編](2014)『「戦後教育学の遺産」の記録(資料集 No.2)』[新堀通也 広島大学名誉教授、佐々木享 名古屋大学名誉教授、池田祥子 元こども教育宝仙大学教授]。
- 日本教育学会特別課題研究委員会「戦後教育学の遺産」研究会[編](2015)『「戦後教育学の遺産」の記録(資料集 No.3)』[市川昭午 国立学校財務・経営センター名誉教授/国立教育政策研究所名誉所員、竹内常一 國學院大學名誉教授、堀尾輝久 東京大学名誉教授]。
- 森田尚人[編](2009a)『聞き書 上田薫回顧録』教育哲学会特定課題研究助成プロジェクト 「教育学史の再検討」グループ。
- 森田尚人[編](2009b)『聞き書 村井実回顧録』教育哲学会特定課題研究助成プロジェクト 「教育学史の再検討」グループ。
- 矢野智司(2021)『京都学派と自覚の教育学 篠原助市・長田新・木村素衛から戦後教育学まで』勁草書房。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 櫻井 歓	4. 巻 第33号
2. 論文標題 京都学派教育学という 場所 亀裂 を西田哲学の視点から見直す	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井 歓	4. 巻 2023年号
2. 論文標題 奥平康熙の歩みと道徳教育研究 「教育の生活課題化的構成」の思想	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部芸術研究所紀要	6. 最初と最後の頁 64-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井 歓	4. 巻 905
2. 論文標題 「資質・能力」と道徳性の問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 57-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井 歓	4. 巻 72
2. 論文標題 藤田昌士の歩みと道徳教育研究 勝田守一「自主性」論の受容と継承	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下司 晶・須川公央・安道健太郎・宮澤康人・櫻井 歓・後藤悠帆	4. 巻 29
2. 論文標題 教育学のフロイト受容を問いなおす 宮澤康人氏の仕事を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 139-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井 歓	4. 巻 71
2. 論文標題 「総合的な学習の時間」の哲学的背景 梅根悟のカリキュラム思想と関わって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井 歓	4. 巻 69
2. 論文標題 学校儀式における国旗・国歌の取扱いに関する一考察 天野貞祐の哲学と教育思想	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 櫻井 歓	4. 巻 67
2. 論文標題 社会科における問題解決学習の再考 戦後日本のカリキュラム史にみる総合学習の一様式	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 櫻井 歓
2. 発表標題 教育学研究者の自己形成と戦後日本の教育学（その2） 奥平康熙氏への聴き取り調査を中心に
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 櫻井 歓
2. 発表標題 藤田昌士の歩みと道徳教育研究 勝田守一「自主性」論の受容と継承
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻井 歓
2. 発表標題 戦後教育学とフロイトとの 出会いそびれ 指定討論者メモ
3. 学会等名 教育思想史学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 櫻井 歓 [編]	4. 発行年 2023年
2. 出版社 櫻井 歓 [発行]	5. 総ページ数 157
3. 書名 教育学研究者の自己形成と戦後日本の教育学（その2） 奥平康熙氏への聴き取り調査の記録	

1. 著者名 櫻井 歓 [編]	4. 発行年 2019年
2. 出版社 櫻井 歓 [発行]	5. 総ページ数 227
3. 書名 教育学研究者の自己形成と戦後日本の教育学 堀尾輝久氏、宮澤康人氏、藤田昌士氏への聴き取り調査の記録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔研究会報告〕 櫻井歓「自主的に判断することの難しさ 「マスク社会」のなかで勝田教育学を読み直す 」第60回教育科学研究会全国大会（2022年）
〔エッセイ〕 櫻井歓「思想家の骨をつかむ 西田幾多郎の読書論 」『日藝ライブラリー（日本大学図書館芸術学部分館活動誌）』第6号（2022年）40-41頁

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------